

# 脱炭素へ適切補修

## J C M A 東京フォーラムに700人



徳納会長

00人が聴講した。

コンクリートメンテナンス協会(JCMA)は5月から8月にかけて「コンクリート構造物の補修・補強に関するフォーラム2023」を全国10都市で開催している。6月13、14の両日に東京フォーラムが江東区江東公会堂で開かれ、約7

00人が聴講した。徳納剛会長は開会あいさつで「適切な補修でコンクリート構造物の延命化を図ること、二酸化炭素排出量の多い撤去・新設工事を減らせ、脱炭素社会の構築に寄与する」と話し「適切な調査・診断・補修設計・補修工事は維持管理に関わる技術者の責務だ」と述べるなど、延命化が二酸化炭素排出量の多い新設工事抑制につながると指摘した。

講演では国土交通省

大臣官房技術審議官の佐藤寿延氏が「国土交通行政の最新動向」の題で講演した。グリーンイノベーション基金の「CO<sub>2</sub>を用いたコンクリート等製造技術開発」には、プロジェクト平均規模額の200億円を上回る550億円が充てられており「手厚い支援がなされている」と説明した。芝浦工業大学の濱崎仁教授は「歴史的構造物の保存・修復」鉄筋

コンクリート造の現状と課題」を解説した。日本最古である1916年造の鉄筋コンクリート(RC)構造物が建つ長崎県の軍艦島を紹介し、同地を活用した老朽化対策の推進が重要と論じた。京都大学の宮川豊章名誉教授は「コンクリート構造物の健康寿命を脱炭素戦略の中で確保するために」の題で講演。技術は「作る」と「確かめる」を二本柱として念頭に置く必要があると強調した。コンクリートメンテナ

ンス協会技術委員長の江良和徳氏は「コンクリート構造物の健康寿命を延ばすための維持管理の考え方」を説明した。塩害・中性化による劣化への補修は、劣化過程を「潜伏期」「進展期」「加速前期」「加速後期」の4段階に分類し、再劣化の許容の可否を決めたうえで最適な工法を選択すべきと示した。COREE技術研究所社長の真鍋英規氏は「コンクリート構造物の調査、診断技術」を解説した。コンクリート構造物で測定した伝播速度を使って解析し内部の欠陥位置を可視化、推定するトモグラフィ調査などを紹介した。

14日は、セメント協会の森寛晃氏が「セメント系補修材料の使い方」、近未来コンクリート研究会代表の十河茂幸氏が「予防保全を目的としたコンクリート構造物の点検要領」、江良氏が「コンクリート構造物の健康寿命を延ばすための亜硝酸リチウムの活用」、CP工法研究会・エルガード協会の佐々木亘氏が「電気防食技術と施工事例の紹介」、Jーティーフコム施工協会理事の上阪康雄氏が「コンクリート構造物の健康寿命を延ばすJーティーフコム」の題でそれぞれ講演した。

能組えル脱及一減よるす新た2ト使量向荷